
ハナノナノ（未定） 6

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 6

【Nコード】

N3018V

【作者名】

希羽

【あらすじ】

縦読み推奨 ここで一章が終わります。

ここまでは前座で、ここからが本編のようなものです。

起承転結で言うところの、起が終わったあたりですが、全体の約三分の一の分量を書いたことになります。

こんなペースで大丈夫なんだろうか…

不安は募る

ご意見ご感想、お待ちしております。

翌日、再び七恵結からメールが届く。

そのとき僕はちょうど、教室でひとり、弁当を食べていた。

誤解されないように忠告しておくが、何も友人が一人もできていないわけではない。先日の方があってか、みんな僕への評価をクラスメイトから要注意人物に格上げしてくれているだけだ。終始、注意に要をつけて心の距離を置いてくれているだけなのだ。人間、関係が近過ぎるとお互いの嫌なところが見えてしまいハリネズミのジレンマに発展しかねない。適度に壁を作っておくことは社会性の高い生物であることの象徴とも言うべき我々の長所であり、いかなる雑感がそこに混じっているとしても、決して恥ずべき好意ではない。そして、そうやって揺るがない自尊心を手言えるきっかけを僕に与えてくれたくれた賀川クソに感服する次第だ。

「なんつーとぼっちりだよ、賀川の野郎……」

「ひっ！」とか言って、すっかりバカップルのお手本となった前席の男女がこちらをチラ見してくる。

僕を上手く悪者に仕立て上げて口説きのネタにしている男子生徒は、「俺が守ってやるから」などと吐き気を催すセリフで食事どきに悪臭を撒き散らす。精神衛生的な面で近所迷惑だ。まあお互い様なんだが。咳をしただけでこれだから、今後は口に消音器でもつけて登校してこようかな。

少し離れた位置で机を四つくっつけ、小女子会に励んでいる生徒たちからキーキーと高い声が漏れてくる。

「昨日、部室棟のどっかで喧嘩あったらしいよ?」「ウソー?この学校マジ危なくなーい?」「一人は脱臼して入院らしいし」「残りの二人も顔面アザだらけで酷いらしいよ」「マージ?誰に襲われたとかわかんないの?」「それが、言ったら今度は本当にやられるって怖がって、言わないらしい」「何それ通り魔じゃーん」

語尾に女子高生特有のアクセントをつけて、そう話していた。

入院はやり過ぎだろう。まあ、一对三で、しかも相手が救いようのない下衆だし、僕は一方的な被害者だから同情の気持ちは絶無だけど。

そして、問題の賀川とは当然のように席を離され、彼は今、僕のもといた席である最前列右端に番犬となって座っている。

あんな好戦的な番犬がいればこの教室は一年間安泰だろう。そこらへんの狎犬こまいぬよりも現実的で物理的な御利益が望める。僕個人からしたら、益やくを得るより、まさに厄やぐ払いに近い。状況に甘んじて可能な限り後ろの扉を利用することになっている。

受信BOXを開いた。送信者の欄に『七恵結』。

『今日放課後空いてる? 空いてたら昨日と同じ場所に6時に来て欲しいです 用事がある場合は教えてください』

昨日の最低限の文書がより碎けて、最後に小さなハートマークが設置されている。

用事などないので、返信せずにそのまま予定に加えた。

それにしても6時は少し遅い気がする。授業が終わってからなかなか時間があるよな。あちらの都合かもしれないので深くは考えずに携帯を閉じた。

その後、授業中に3回、放課後に5回、計8回そのハートマークが気になってメールを開いたが、特に意味はないです。暇つぶしです。

—PM05..55—

少し早く例のN棟の部室前に来る。

途中、廊下に散りばめられた赤黒い斑点が気になったけど、新種のカビか何かと思って通り過ぎた。

引き戸は半開きのままで、中では七恵結がなにやらごそごそと窓際に寄ってやっていた。

部室内を見渡すと、昨日よりはどこか整理整頓されていて、机と椅子が一組増えている。全体的には簡素な部屋だが、荷物が少ないのでさらにもう寂しい印象を受ける。中にある家具といえば、机椅子2組に加え、縦長の安っぽいロッカーが一つと、窓際に棚が一つ。七恵結の影に隠れて見えにくいのが、棚の上にあるのは——

「花瓶？」

「にゅっ！」と鳴いてこちらを向いた彼女の顔の隅で、青白い花が場違いに咲いていた。

何やってんだこの人…。

「早いよお！」

そういいながら、こちらに駆け寄って引き戸を閉めようと奮闘するも、立て付けの悪くなった戸はギシギシとクレームを述べるばかりで動く気配がない。

「すいません。お食事中でしたか」

「ちがくてっ…もうう！」

小さな拳でスカートをぽんと叩く。唇の端で健気に咲く花を指で摘み、ちよっと考えた後にやっぱりはむっと口に放り込んで、片頬を膨らましながらもぐもぐし始めた。

呑みこんで、息を吐く。

花の香りがした。

「せっかちさんですのう！」

悔しそうに、さっきと反対の頬を膨らませた。

「座右の銘が5分前行動ですので」

「時間の猶予より心のゆとりを大切にしようでしょう」

「紳士の嗜みたしなですので」

「覗き見がですか？それはご立派な紳士ですこと」

「覗き見とは人聞きの悪い。ただの下見ですよ」

「ものは言い様ですね」

言い終えて引き戸をゆっくり開こうとすると、案外滑りが良かった。きつと強引に動かすと引っかかる仕組みだろう。

「い、いらっしゃいませ」

彼女は片意地を張りながらも、小声でごによごによと呟く。高級料亭なら一発で足切りだ。

「いらっしゃいました、けど」

なんだろう、この空気…。

「どうでしょう？」

両手を広げて、室内を一通り見回す。

僕もつられて見回す。

何かを期待する横目をチラつかせて、後ろで手を組む家主。

「えっと…。いいですね」

お世辞どころか、何に対しての感想かも不明のまま親指を立ててみた。

くだらない小芝居のつもりが、満更でもないらしく、ぱあっと笑顔が光り、それを隠すような動作ですぐにそっぽを向き、言った。

「ここが、今日からあなたの部室です」

「部室？」

「あなたには、うちの部に入ってもらいます。それが、昨日言った”一緒にいる”という約束を果たす第一歩なのです」

「はあ…」

我ながら情けない声で応答する。

何の真似ごとなのか、彼女はどこぞの博士のような説明口調だ。

「それで、ここは一体全体なんの部活なんですか？」

待ってましたと言わんばかりに——「待ってました!」——
言いながらドアのある壁の上、僕の背後を指さす。

そこには横に長い白地の布に、筆か何かで部名が書かれていた。

『生活応援部』

…だっせえ

文字をどう入れ替え、どう付け足しても、削っても、改善の手が止まるほどにやるせないタイトルだった。

それどころか、何を目的とする部活なのか不明でしかない。左脳より右脳を使うべき想像力の分野に帰属する難題に思える。

振り返れば、彼女はなにやら自慢げに腕組みをしていて、照れ隠しに「まあねえーえへ」などと一人で謙遜の笑みを浮かべてるし。なんだ？何を褒められると自負しているのか？字か？

確かに、観点を変えれば筆の流れは首尾よく、さらに言えば龍のように力強くあっばれなものだ。

そういった見地に基づき、飽くまで字に関する意向で「これは素晴らしい」と僕は両手を叩く。

手のひらから乾いた音がした。

「そ、そんなことないよお…むふう」

嬉しそうなのはいいことだし、無為に夢を壊す理由もないので、そのまま話を進めることにした。

「それで…何をする部活なんですか？」

ちよつとご機嫌になった彼女は、快活そうな笑顔で「ん？それはね!」と指を一本立てて僕の前に突き出した。

「ひみつ!」

「まだ」をお尻に付け足して解説を締めくくった。

あなたが表明してくださらないと、この脳内のもやもやをどうやって払拭したらいいのやら…。

「君にはまだ早い。今の段階では、まずは一緒に過ごすこと自体が有意義じゃない?」

と、いいかげん真剣みを取り戻して表情を述べる七恵結。

確かに、記憶を再発行させるためには会話を交わし、以前のように接することが先決かもしれない。

しかし、だからと言って、それは果たして、理想的な時間なんだろうか？

意義と異議とが螺旋を描いて脳内でぶつかり合う。

あぶり出されるのは答えではなく、成り行きに任せるケセラセラ思考だった。

「そこで！今日は色々決めようと思いまする！」

「おもいまするか…」

何訛りなんだろうか。

「まずは座って！」

言われるがままに、向かい合って座ることにした。

何が始まるのか、不安と不審で胸が躍る。

「まずはですね、お互いがお互いを知る必要があると思いまする」

「そうですね」

「なので、質問大会をしたいと思いまする」

「はい」

「まする…っ」

自分で言いだして、自らのツボにはまり悦に入った。それを必死に堪えることにはおおかた成功しているが、その吹き出しそうで噴出さない絶妙な顔が逆に、悔しいのだが、魅力的で焦る。

「はぁ…帰ってもいいですか？」

「ごめん！これは、その、ちがくて！」

立ちあがろうとする僕の肩を、立ちあがって両手で下に押す七恵結。

「本題に入りましょうか。こほんこほん。まず、以前の私は、あなたのことを何と呼んでいましたか？」

僭越ながら申し上げます。

「そんなもん言えるかよ」

「どうして？本によると、昔の呼び名などで呼ばれるとその時の情

景が呼び起されて記憶の想起が起る可能性がある、だってよ」

本の一節を音読するときだけ、またさっきの博士の真似ごとのような口ぶりになる。

「そりゃ…そうでしょうけど」

ここで嘘をついてもいいのだが、そんなことをしては本末転倒だ。腹をくくるか。

「じゅんちゃん…？」

僕の弱い心が、語尾を疑問形にしてぼやかした。首をかしげてしまう。

対して七恵結は「おー」と納得した顔をして早速、「よろしく純ちゃん」などとのたまうので、机にガンツと両肘をつけて両手で顔を覆ってしまう。

「なーんでそんな顔隠すの？可愛いじゃん、純ちゃん」

「人はみな、仮面をつけて、本当の自分を偽って生きていくんです。だからちゃんづけはやめてください。絶対に」

「純ちゃんいいんだけどなー…」

これで悪意がなく、純朴なのが追って僕に苦しみを与える。

「じゃあ、純で」

「朝夷でいいっす」

「だめです」

また強情になって譲らない。

指の間から、また片頬で憤りの加減を表すのが見えた。

最悪の事態を免れただけでも、よしとしよう。

「第二問です。逆に純は私のことを何て呼んでいたのですか？」

「七恵先輩です」

「嘘でしょう？」

「…。いやっ、嘘じゃ」

「嘘ですね。本当は？」

「ゆん…ねー…じゃね？知らねっ」

またまた僕は首をかしげてしまう。暁を覚えない春眠が僕の首筋

をかためているのか、季節感に苛まれる。

「ユニネージャネ?…長いね。間をとって結さんで」

「結さん…じっくりこないな…」

「じゃあ結先輩で」

「七恵先輩は?」

「だーめ!呼び名が遠いでしょう?それでは意味がないの。せめて結先輩ね」

「わかりましたよ…。それでいきましょう。ゆ、結先輩」

「よし。じゃあ次の質問いきますね—————」

そうやって、僕と七恵結の記憶を取り戻すための日常は始まった。
一歩ずつ、一歩ずつ、歩くように、始まった。

(後書き)

ありがとうございました！

ご意見・感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3018v/>

ハナノナノ（未定） 6

2011年7月31日03時26分発行